

市民がつくる
市民が学ぶ
市民が拓く
生涯学習情報誌

Stage

月刊ステージ・アップ

up

'94
9

月号【1日発行】

好評前売り中

いま魅惑る 甘くやるせないフランス映画音楽……
フランシス・レイ グランドオーケストラ



浮島の海



いまを話す

大学・社会教育の現場で
ユニークな授業をする
西村美東士 短大
助教授 大
生涯学習をいい男女の出会いの場に

いまを話す

ゲスト

大学・社会教育の現場で
ユニークな授業を実践する
昭和音大短大助教授

西村 美東士 さん

Vol.27



生涯学習

いばりたい人、いりません
いい男女の
自立めざす 出合いの場に

「学習とは、人生への構えや考えを自ら変えること。生涯学習はいい男といい女が出会うワンダーランド(おとぎの国)」。Mi-toちゃんの話はDJのノリ。だが説得力も抜群。それもそのはず、Mi-toちゃんこと西村美東士さんは、大学教育と社会教育現場の経験者。「大学の授業や生涯学習は、知識の詰め込みより、主体性と批評精神を得るためのもの」と言い切る。学生や社会人研修での受講者が思いのたけを書く「出席ペーパー」の導入は、時としてMi-toちゃん批判の直撃弾にも。「僕にはそれも楽しい」とおおらか。「授業は真剣勝負。ピートたけしに勝つ」との宣言は「ツーウェイ・コミュニケーション授業」への確かな手応えによるものか。

——西村先生の著書『こ・こ・生涯学習——いばりたい人いりません(学文社発行)の中にディスコの話がありますが、先生も踊るんですか。

西村さん はい。先日も狛江市の青年教室でステップを教えました。並んで踊る七〇年代のディスコです。僕の最初の勤め先は東京都の「青年の家」ですが、そこでディスコ・フェスティバルをやったのが最初なんです。

——社会教育施設でディスコ。抵抗もあったのでは……。

西村さん ええ。社会教育施設でのディスコは日本で初めてだったと思います。ですから、最初は所内でも心配されました。

——どうやって、このフェスティバルを具体化したのでしょうか。

西村さん まず、新宿・歌舞伎町のディスコの店長をよんで、本格的にステップを習いました。回を重ねるにつれて、カッコよく踊るだけだったディスコボーイが、いつの間にか、みんなに教えているんですね。その時は感激しました(うなずきながら)。

——ディスコボーイといえば、グループ活動嫌いが定説ですよ。そんな若者が仲間に入り、教えたわけですね。どうして心境の変化が起こったのでしょうか。

西村さん それは「人に幸せを配る」という質の高いおもしろさを味わえたからだと思いますね。

——その気持ちわかります。

西村さん たとえば、「もつと女房が優しくしてくれたら」と思ったら、僕の方から声をかければよい。つまり「してあげる」から「してもらえる」気持ちのいいギブ&テイクの関係になる。実際には、そううまくはいきませんが(笑う)。

開放的な心育てるグループ活動

会員個々の人格認めあい

でも、そういう風土を、社会教育や生涯学習の中に作り出せればいいなと思うんです。

——そんな楽しい社会にする前提は……。

西村さん やはり、水平な人間関係でしょうね。地位、身分、肩



書きにとらわれた上下関係でなく、同じ人間としてお互いを尊重しあうことが重要です。

——理想論の感じもしますが。

西村さん 理想主義に聞こえるでしょうね。僕は、いじめられっ子だったので、屈折しているんです。小学生のころ、キックベースボールが僕のせいで負けるたびに、

校庭でバケツをかぶらされて蹴られた思い出があります。

——先生は見るからにネアカ。

西村さん 「いばりたい人、いりません」というのを生涯学習のテーマにしているのも、この体験から生まれているんです。

——ほーお。

西村さん 一度しか生きられない人生なのに、つまらない出会いしかできないのは、もったいない。僕の好きな詩に「ゲシュタルトの祈り」があります。「私は私のことをする。あなたはあなたのことをする。私は、あなたの期待に沿うために生きていくのではない。あなたも、私の期待に沿うために生きていくのではない。私は私。あなたもあなたである。でも、そういう二人が出会うとすれば、素晴らしい。出会えなければ、それは仕方がない」というものです。

——生涯学習の場が、そういう

個人の出会いを生む方向に進むといいですね。

西村さん そうなんです。これからの生涯学習は「いい男といい女」の自立に向けた出会いの場だと思っんです。それが「生涯学習のまちづくり」につながり「ネットワーク型社会」に向けた社会創造となるんですね。だからこそ行政が税金を使って支援する意味もあるんです（ひびぎを乗り出すようにして）。

——いまのお話で、生涯学習と地域コミュニティの関連が見えてきました。

西村さん 川崎にいくつかのママさんクラスがありますね。グループがあると、その人たちの学習ニーズ（欲求）が充足されますが、同時にまちのアメニティ、住



伊藤真弓さん

み心地の良さにもつながります。だけれども参加できる多くのグループがあれば、自然にオープン・マインド（開放的な心）が育ちます。

——グループ活動をするオープンマインドが自然に育つ？

西村さん ええ。グループを維持・発展させるには、会員同士が対等な立場で個々の人格を認め合うことが大切なんです。つまり、生涯学習のまちづくりとは、個々の住民自身が幸福を追求しあうこ

西村 美東士 さん

にしむら・みとし=1953年東京生まれ。東大教育学部卒。77年から東京都教委社会教育主事補として「青年の家」に勤務。86年から国立社会教育研修所専門職員。90年から昭和音楽大学短大助教授。東洋大非常勤講師、神奈川県生涯学習審議会専門委員や他の市町村の委員も。川崎市内では市民館などで講師を5回務める。学生からは「mitoちゃん」の愛称で慕われる。家族は妻と長男。

「語り」伊藤真弓さんが聞く

先生批判歓迎の「出席ペーパー」 暴力とSEX以外は受けて立つ!

とで、まちづくりを創造する主人公になれる世界だと思います。

——本当にそうですね。「まちづくりは人づくり」ともいいますが……。

西村さん でも、僕はそれには反対なんです。「素晴らしい人が、



素晴らしい人をつくり変える」という考えはおかしい。僕は本人が自己解決能力あるいは自己教育力を発揮して、本人が本人をつくりだすと思うんです。中国の思想に「吾づくり」という言葉があるのですが、僕も吾づくりならあると思います。

——話を先生の授業に移します。とてもユニークそうですね。

西村さん 教員になるまでは、人前でしゃべるのは苦手だったんです。いまは無謀にも「ビートたけしに勝つ」と宣言して、自分にプレッシャーをかけているんです(笑い)。僕の授業では入退室、飲食すべてが自由です。出席ペーパーの試みもしています。

——出席ペーパーって何ですか。西村さん 僕の講義を聴いて学生が感じたことや考えたことを、どんなことでもよいから書いてもらうのが出席ペーパーです。出席ペーパーについての僕のコメント

は、次の授業で行います。ねらいは「ツウウェイ・コミュニケーション」なんです。

——学生から意見や先生への批判がくる。しんどい事は……。

西村さん 僕はそれがとても楽しい。新しい出会いなんです。彼女(学生)たちも日々、新しい自分と出会っています。書くことによつてそれに気付き、客観視できるんだと思います。



——本当に書くことで、自分を見つめ直せますね。ペーパーの提出は学生の義務ですか。

西村さん そんなことはありません。全く学生の自由意思です。生涯学習の精神は、自分の学びたいことを学びたい方法で学ぶことですから(さりと)。

——先生のコメントを拝見すると、素直に「ごめんなさい」と謝ったりしていますね。

西村さん はい。僕は、最初の授業で「暴力とセックス以外はすべて受けて立つ」と学生に約束して実際にそうしています。こうした授業方法に不快感を覚える学生もいるようですが……。

——最近の学生の特徴は。

西村さん 「自己変容したくない」「教育されたくない」という気持ちがあるんじゃないですか。ゲームなどの体験学習による態度変容を目的とした授業をするとき、「許せない」という反応が特に多い。それは社会が行う教育や僕に対して、絶望的なまでの不信感を持っていてからでしょう。また、「論争自体、したくない」という学生も多い(やや表情がくもる)。

——本来、学生は教育されるために学校に入るわけですが、教育とは何なのでしょう。

西村さん 僕は、個々の学生が自ら主体性を獲得するための援助が教育だと思っています。しかし、学生の中には知識だけを教えてくれればよいという人もいます。

僕は学生に「文字で得られる知識は、本を読んで」と言ってきた。本を読んで知識を得ることも大切です。しかし、出席ペーパー

「に書いたりすることによって批評精神を養い、自立的な思考と行動に結び付けることが、現代人の主体性獲得のために緊急に求められていると思います。」

——先生は「楽習と共育」(楽しく学ぶ・共に育つ)を教育の基本に据えています。小学高学年からの凄まじい「知識の詰め込み競争」としての受験戦争を考えれば、学生の反発は当然かも……。



西村さん 面白い視点ですね(笑いながら)。

——先生は社会人を対象にした講演会や研修会でもご活躍ですが、最近、お感じになったことは。

西村さん 組織と自分とのスタンスのとり方がわからない人が多くなっています。「自分には個性も能力もあるが、それを發揮したら中間管理職が可哀そうだから仕事は上司に言われたことだけをやる。」

自分らしさの發揮は土・日曜だけ」と書いてくれた人がいます。これは自信過剰のピーターパン症候群の表れで「食べられなかったけれど、あれはどうせ酸っぱいブドウさ」という話と同じです。

——チャレンジ精神が欠如？

西村さん 研修会の講師で呼ばれた時も出席ペーパーを配るんです。ある百人以上の管理職研修で、一枚もペーパーが出なかったのは驚きました。ピラミッド型構造の中で、自己表現欲求が抑圧されているのではないのでしょうか。

ところが、茅ヶ崎市の公民館運営審議会委員研修では、ウーマンパワーに「どンドン」「待った」をかけたられました。地域やボランティアの水平的世界には大きなパワーがあります。会社人間がボランティアや地域に回帰しているのと重なると思うんです(しみじみと)。

——生涯学習とは、ずばり何なのでしょ。



西村さん 生涯学習の原点は二つです。どこまでも知りたいという欲求と、癒されたいという欲求です。いいかえると発達と受容です。学習とは、自らの感動とか納得の中で自分の枠組みを自ら変えていくことです。山歩きをして感動することも家族が仲良くすること、能動的な活動には生涯学習としての側面があるといえます。

——これからの生涯学習に求め

られることは何でしょうか。

西村さん 遊び型学習をどんどん取り入れていくこと、学習成果の社会還元、パソコン通信の活用などの双方向メディアの活用です。

——さて、家庭でお子さんには、どのような教育をされていますか。

西村さん 過保護なんですね。子どもには、めちやくちやにべたべたしたい方ですね(苦笑い)。

——最後に、この事業団が発行している「ステージ・アップ」にアドバイスをひと言。

西村さん バックナンバーを見て、ナマの情報が集積されていると感じました。パソコン通信で一番人気があるのは「おしやべりサロン」です。それと同じ魅力があります。バックナンバーの総索引や分野別記事の索引を作ってはどうかでしょうか。市民にとって、いつでも魅力のある情報源になると思っています。

——ざん新な生涯学習論を楽しみませんか、ありがとうございます。

自己表現力を喪失した管理職 パワーある地域活動者の発言

題字は高橋清・市長
構成／野々川千恵子
文責／田中 閑